

松山櫛便り

第22号

購読
無料

1日・15日発行・櫛に関する情報求ム!
福岡県久留米市田主丸町で活動中!
編集・発行 松山櫛復活委員会
幹事・矢野真由美

耳納山の片隅で失われてしまった櫛紅葉の景観を復活させることを目的に、櫛の素人がまったりとその様子を伝えていく会報です。

ブログ公開中「松山櫛復活奮闘日記」 <http://blog.goo.ne.jp/elster/>
連絡先 e-mail : elster@mail.goo.ne.jp ホームページ「松山櫛復活委員会」 近日公開予定



最後に巻いた芯を手に取る徳田さん。

和ろうそく芯物語 その2 朝倉市が本場だった

お年寄りの内職として

たまたま朝倉市に和ろうそくの芯を巻いている職人がいることを知り、さっそく会って話を聞くことができました。徳田さんです。

徳田さんは78才。徳田さんの一族が芯巻き作業を始めたのは昭和初期だそうで、それ以前は馬の鞍を作る職人をしていました。

芯巻き作業は、重労働の農作業と違い、家の中に座って出来る軽作業のため、お年寄りの内職として、市内には最盛期で20人程度が従事していました。

このような芯巻き職人は、今でも各地にいらっしゃるが、芯を扱う業者は、各地の芯巻き職人から芯を買取り、ろうそく職人に卸しています。

前号までのあらすじ
前回から和ろうそくの芯についてお伝えしています。なぜ和ろうそくは、普通のローソクのように糸芯でなく、イグサと和紙でできている芯を使うのか。それは日本人が、炎の明るさと美しさにこだわってきたせいでした。

昭和40年代頃まで、市内の田んぼには芯に使うイグサ(灯芯草)が植えられており、茎の中の髓(灯心)を引き出す作業も同時に行われていたそうです。寒い冬にイグサを冷たい水で洗った後、一本ずつ髓を引き出すのは辛いものだったと言います。

朝倉市には 灯芯草もあった

徳田さんは年代物の古く小さな作業機を取り出し、どうやって一本ずつ巻いていたかの説明をしてくれました。(右下写真)



芯巻き作業の様子を教えてくださいました。

楽しかった芯巻き作業

徳田さんは最後に巻いた一束を手にとると、当時は思い出し、うっすらと涙を浮かべました。私も悲しくなりました。
「それじゃ、朝倉市には、他に芯巻きをしておられる方は、いらっしゃらないんですか?」
「いや、おる!おりますよ。二歳年下の義妹が!今も現役で巻いとるとですよ。すぐ近くに住んでるから、もしよかったら、一緒に会いに行きましょう!」
こうして、私は現役の芯巻き職人である、もう一人の徳田さんと出会うことになりました。

続きは次号にて

松山櫛の
状況は...

江戸時代に田主丸町森部で発見された櫛の優秀な品種「松山櫛」。朝倉市に一ヶ所だけ残っていた松山櫛を、故郷である田主丸に復活させるため、接ぎ木を行い一本だけ活着に成功しました。今のところ、なんとか育てています。

※本会報を許可なく複製・転載すること、または部分的にもコピーすることを禁じます。